

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32647

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00847

研究課題名（和文）英語授業内における訂正フィードバック指導モデルの構築

研究課題名（英文）Model for teaching corrective feedback in the English language classroom

研究代表者

田頭 憲二（TAGASHIRA, Kenji）

東京家政大学・人文学部・准教授

研究者番号：00403519

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、今後の中学校、高等学校段階における英語授業において必要とされる英語教師の英語によるティーチャートーク（teacher talk）の中でも、学習者の発話の誤りに対するCFに焦点を当てることで、日本の英語教育での教室場面における訂正フィードバック（corrective feedback）の出現頻度および種類と英語学習者の第二言語発達を促進するCFの効果を明らかにするとともに、ピア学習者の観点から検証を行うことで、教員養成や教員研修の際に有益な見地を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、日本の中学校および高等学校段階における英語授業においては、より多くの英語を学習者が用いることが推奨されている。この場合、学習者の発話の中には、誤りを含んだものが表出する。教師は、その発話の誤りに対して、訂正をする目的で何からのフィードバックを行うことになる。しかし、このフィードバックが実際に学習者の発達を促すのかに関しては明らかとなっていない。本研究の結果、教師のフィードバックには効果があり、グループ活動を多く取り入れることでより効果的であることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we focused on teacher talk in English, which is necessary in future English classes at the junior high and high school levels. By focusing on CF for learners' errors as well as the frequency and types of CF in English classroom in Japan, and the effects of CF in promoting English learners' second language development, the study provides useful insights for teacher training and teacher education. The results of this study are useful for teacher training and teacher education.

研究分野：英語教育

キーワード：英語授業 訂正フィードバック

1. 研究開始当初の背景

文部科学省は学習指導要領解説(平成29年7月)において、「授業は英語で行うことを基本とする」とし、中学校英語授業における教師と生徒または生徒同士による話すことのやり取りが求められている。そのため、現在の英語授業では、英語の授業を英語で教えることが求められているが、どのように英語で授業をすれば学習者の言語習得または言語発達に役立つのかについて具体的な方策は示されていない。また、研究面においても、Lyster and Ranta (1997)の訂正フィードバック(corrective feedback、以下、CF)に関する研究以降、第二言語習得における Instructed SLA 分野において、様々なCFの効果に関する多くの報告がなされてきた。これらの先行研究結果から、数多くの英語教育に対する知見が得られているが、幾つかの問題点が挙げられる。更には、これらの研究は、ESL(第二言語としての英語)を基に行われたものであり、EFL(外国語としての英語)である日本の英語教育の言語教授場面に応用が可能かの検証は未だなされていない。そのため、日本の実際の英語授業内での英語学習者についての検証を行う必要がある。本研究は、教師がどのように英語を使えばいいのか、生徒にどのように英語を使わせればいいのかについて具体的な示唆を与えることができる。

2. 研究の目的

本研究においては、今後の中学校、高等学校段階における英語授業において必要とされる英語教師の英語によるティーチャートーク(teacher talk)の中でも、学習者の発話の誤りに対するCFに焦点を当てることで、(1)日本の英語教育での教室場面におけるCFの出現頻度および種類と(2)英語学習者の第二言語発達を促進するCFの効果を明らかにするとともに、(3)ピア学習者の観点から検証を行うことで、教員養成や教員研修の際に有効な教育的指導モデルを確立することを目的としている。

3. 研究の方法

(1) インタラクション仮説によると、学習者は、相互作用により対話者からの理解可能なインプットを受け、修正アウトプットを産出する中で、意味や形式の交渉の機会を与えられる(Long, 1996)。この相互作用の中で、学習者が受けるCFとしてのリキャストは様々な教室環境において使用され、他のCFとの比較研究が行われている(Nassaji, 2015)。また、リキャストは、文法的正確さへの影響のみならず、第二言語発達としての発達段階を促進するとされる(Mackey & Philp, 1998)。

(2) 日本の英語教育での教室場面におけるCFの出現頻度および種類

多くの研究では、海外の教室環境で行われ、どのCFが効果的であるかという記述に留まり、結果に対する説明的、または分析的な観点を欠いた状態である。また、日本の場合においても、日本語教育分野における調査(e.g., 畑佐・藤原, 2012)に留まっていることから、英語授業において、(1)どの種類のCFが、(2)どの程度行われているのかについて明らかとすることを目的とする。

研究課題1:日本人中学校英語教師による英語授業において、教師と生徒のやり取りの中で、教師が生徒の発話に対して与えるCFは、どのような種類が見られるか。

研究課題2:日本人中学校英語教師による英語授業において、教師と生徒のやり取りの中で、教師が生徒の発話に対して与えるCFは、どんな場面で行われているか。

対象は、日本人英語教師(33名)であり、英語を英語で行う授業を実践し、50%以上を英語で授業を行っている授業、また、教師と生徒のやり取りがある授業である88の授業を抽出し、さらに、教師と生徒のやり取りの中で、教師が生徒の発話に対してCFが見られた43の英語授業を分析対象とした。日本人英語教師の教授経験は、経験年数5年未満が2名、5年以上10年未満が8名、10年以上が23名である。分析においては、教師による生徒の発話に対するCFをLyster and Ranta(1997)の分析方法を基に分類し、さらに英語授業のどのような場面でCFが行われたかに関して行われた。授業の場面は、金谷(2009)を基に、1)warm-up、2)復習、3)新出事項の導入・練習、4)教科書本文の導入・内容理解、5)コミュニケーション活動の場面を設定し分類された。その結果、CFが見られた中学校英語授業(43件)のうち、教師と生徒によるやり取りの中で、教師による生徒の発話に対するCFはのべ96件であった。また、授業場面によって使用されるCFの種類および件数が異なることが明らかとなった。

表 英語授業場面別において使用される CF の種類および件数 (%)

	使用数	場面				
		Warm-up	復習	導入・練習	本文導入 内容理解	CA
1. リキャスト	55(57%)	11(20%)	3(5%)	15(27%)	7(13%)	19(35%)
2. 明示的訂正	5(5%)	2(40%)	0(0%)	2(40%)	1(20%)	0(0%)
3. 明確化要求	2(2%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(50%)	1(50%)
4. メタ言語的修正	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
5. 誘導	8(9%)	0(0%)	1(12.5%)	1(12.5%)	5(62.5%)	1(12.5%)
6. 繰り返し	21(22%)	8(38%)	5(24%)	7(33%)	1(5%)	0(0%)
7. その他	5(5%)	0(0%)	1(20%)	2(40%)	2(20%)	0(0%)
合計	96	21(22%)	10(10%)	27(28%)	17(18%)	21(22%)

(3) 英語学習者の第二言語発達を促進する CF の効果

CFとしてのリキャストは、他のCFとの比較から、その有効性等に関する研究が行われている(Nassaji, 2015)。しかし、複雑な言語項目を目標言語項目とした場合の発達段階に対する影響に関しては未だ明らかではない。そこで、リキャストが、日本人初級英語学習者の疑問文の発達段階(6段階、Pienemann, Johnston, & Brindley, 1988)に与える影響を明らかとすることを目的とする。

研究課題1: 学習者の疑問文の発達段階により、リキャストの疑問文発達段階は異なるのか。
 研究課題2: 学習者の疑問文の発達段階により、リキャスト後の発達段階に影響は見られるのか。

実験協力者は、日本人初級英語学習者(中学校2年生、27名)であり、事前での疑問文の発達段階に関する調査に基づき、発達段階が3以下の学習者(7名)と4以上の学習者(9名)の2群が設定された。材料および手続きとしては、疑問文の産出を目的とした2種類の課題(information gap tasks、約25分)が英語母語話者と個別実験として行われ、疑問文に関する誤りおよび発達段階の低い疑問文に対して、リキャストが与えられた。その結果、学習者の疑問文の発達段階に応じて、リキャストの影響が異なり、経時的分析の結果、発達段階に応じて、リキャストの影響が異なることが明らかとなった。

表 各発達段階の学習者が産出した疑問文およびリキャスト数とその割合 (%)

疑問文 発達段階	リキャスト(発達段階)	リキャスト(発達段階)					全体
		1	2	3	4	5	
4以上 (n = 9)	>3	22 (13.3)	30 (18.1)	24 (14.5)	82 (49.4)	8 (4.8)	166
	<4	4 (6.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	57 (90.5)	2 (3.2)	63
	全体	26 (11.4)	30 (13.1)	24 (10.5)	139 (60.7)	10 (4.4)	229
3以下 (n = 7)	>3	12 (9.4)	37 (28.9)	14 (10.9)	56 (43.8)	9 (7.0)	128
	<4	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	38 (95.0)	2 (5.0)	40
	全体	12 (7.1)	37 (22.0)	14 (8.3)	94 (56.0)	11 (6.5)	168

(4) ピア学習者の観点からの検証(実験2)

現在までの研究においては、NSとの1対1の相互作用が研究対象となっており、グループとしての協働的タスク活動時におけるリキャストの効果に関しては、未だ明らかとなっていない。一方、グループとしての協働的タスク活動の場合、学習者は言語に関する問題解決に協働して取り組み、新しい言語知識の共同構築を行う(Swain, 2000)。この言語学習の機会としての学習者間の意識的な対話はLRE(Language-related episode)(Swain & Lapkin, 1998)と呼ばれ、グループ内の学習者の習熟度や与えられた課題等の違いによって生じるLREの種類や生成量に関して研究が行われてきているが、第二言語発達としての疑問文の発達段階に関する研究は行われていない。そこで、協働的タスク活動において、日本人初級英語学習者のグループに対して与えられる訂正フィードバックとしてのリキャストとグループ内で生成された言語学習機会としてのLREが、疑問文の発達段階に与える影響を明らかとすることを目的とする。

研究課題1: 日本人初級英語学習者のグループに対して与えられた訂正フィードバックとしてのリキャストは、疑問文の発達段階に影響を与えるか。

研究課題2: 日本人初級英語学習者のグループ内において生成された言語学習機会としてのLREsは、疑問文の発達段階に影響を与えるか。

実験協力者は、日本人初級英語学習者(中学校2年生、24名)であり、3名から構成される各グループに分けられた(計8グループ)。また、材料として、疑問文産出を目的とした情報格差課題が使用された。この課題では、各グループは、2つの絵画中に含まれる異なった部分(10か所)を特定するために、対話者に対して質問をするよう指示がなされた。その後、全ての発話に

関して、グループ内の学習者が産出した疑問文発達段階、対話者によるリキャストの疑問文発達段階、グループ内で生成された LREs に関してコード化がなされた。その結果、疑問文の発達段階の産出数（特に、第 4 段階および第 5 段階）に関して、リキャスト数と各グループ内で生成された LREs 数について分析を行った結果、リキャスト数ではなく LRE 数において、疑問文産出数に違いが見られることが分かった。

表 学習者および NS のリキャストにおける疑問文の各発達段階の産出頻度

	Learner's question						NS's recast					
	1	2	3	4	5	Total	1	2	3	4	5	Total
Group 8	9	1	0	12	0	22	0	0	0	17	0	17
Group 13	5	2	0	12	0	19	0	0	1	13	0	14
Group 14	7	0	2	10	0	19	1	0	1	14	1	17
Group 6	19	0	1	8	1	29	2	1	1	5	6	15
Group 1	6	6	1	3	0	16	0	0	3	13	0	16
Group 11	8	12	3	2	0	25	1	6	3	8	0	18
Group 4	11	8	0	0	0	19	0	0	2	14	0	16
Group 12	15	0	3	0	0	18	0	0	1	12	3	16

表 グループ内で生成された各種類の LRE 頻度

	Lexical	Question Formation					Others	Total
		1	2	3	4	5		
Group 8		3	6	5	0	9	0	23
Group 13		0	2	1	2	9	1	15
Group 14		6	11	3	6	7	0	33
Group 6		2	8	2	2	4	1	19
Group 1		0	1	2	1	2	0	7
Group 11		0	1	4	0	1	0	6
Group 4		0	7	4	1	0	0	13
Group 12		0	0	0	1	1	0	2

4. 研究成果

日本の英語教育における中学校の教室場面における CF の現状把握を目的に、授業観察および録画データのうち CF の出現頻度および種類の点から、英語授業の分析を行った結果、英語授業における場面ごとでの学習者の誤りを含んだ発話に対する教授者の CF の提供の傾向が明らかとなった。また、1対1の相互作用においては、学習者の疑問文の発達段階に応じて、リキャストの影響が異なり、経時的分析の結果、発達段階に応じて、リキャストの影響が異なることが明らかとなった。一方、グループの場合、リキャストの効果と比較し、グループ内における LRE が学習者の疑問文の発達段階に影響を与えることを示した。

<引用文献>

Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (pp. 413-468). New York: Academic Press.

Lyster, R., & Ranta, L. (1997) Corrective feedback and learner uptake. *Studies in Second Language Acquisition*, 20, 37-66.

Mackey, A., & Philp, J. (1998). Conversational interaction and second language development: Recasts, responses, and red herrings? *The Modern Language Journal*, 82(3), 338-356. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.1998.tb01211.x>

Nassaji, H. (2015). *The international feedback dimension in instructed second language acquisition: Linking theory, research, and practice*. New York: Bloomsbury Academic.

Pienemann, M., Johnston, M., & Brindley, G. (1988). Constructing an acquisition-based procedure for second language assessment. *Studies in Second Language Acquisition*, 10(2), 217-243. <https://doi.org/10.1017/S0272263100007324>

Swain, M. (2000). The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue. In J. P. Lantolf (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning* (pp. 97-114). Oxford University Press.

Swain, M., & Lapkin, S. (1998). Interaction and second language learning: Two adolescent French immersion students working together. *The Modern Language Journal*, 82(3), 320-337. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.1998.tb01209.x>

金谷憲 (2009). 『[大修館] 英語授業ハンドブック<中学校編>』東京：大修館書店.
畑佐由紀子・藤原ゆかり. (2012)「外国語としての日本語の授業における訂正フィードバックの効果」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』61, 29-237.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 太田洋	4. 巻 70
2. 論文標題 間違いを恐れずに言おうとする授業 三鷹市立三鷹第一中学校・田中佳奈先生の授業から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 42-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田洋	4. 巻 66
2. 論文標題 英語教育における主体的・対話的で深い学び 小・中・高の接続を重視した指導を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山形県英語教育	6. 最初と最後の頁 2~3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田洋	4. 巻 2月号
2. 論文標題 Q3.これまでの観点「言語や文化についての知識・理解」と「知識・技能」との違いは？	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 14~15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田頭憲二・前田 宏美・費田 順子
2. 発表標題 日本人初級英語学習者の協働的タスク活動におけるリキャストおよびLREが疑問文の発達段階に与える影響
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田頭憲二・増淵素子
2. 発表標題 初級英語学習者の疑問文発達段階における訂正フィードバックの影響
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田洋・前田宏美
2. 発表標題 中学校英語指導における誤り訂正の現状
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	太田 洋 (OHTA Hiroshi) (30409825)	東京家政大学・人文学部・教授 (32647)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------